



第23回総会記念講演

図書館は、無数の「知の参照系」を提供する機関である

跡見学園女子大学図書館長 曾田修司

「図書館は大学の経営資源である。」

大学図書館についてのこのテーゼ自体は、誰であれ首肯されるのではないのでしょうか。しかし、その具体的な意味づけについては、いろいろな考え方があると思います。大学図書館の顧客としてすぐに思い浮かぶのは、学生、教職員（もっと大きく言えば、「社会」ということになります）ですが、ここでは学生を対象として考えることにします。

私は図書館長に就任したばかりで、専門家の立場から図書館のあり方について論じる用意はありません。そのかわり、以下、やや遠回りになりますが、私が考える図書館の社会的な役割について、私がこれまで研究及び実践に関わってきた文化政策の分野の事例を題材として取り上げ、「参照系」という言葉を使ってご説明します。

ここで、特に強調しておきたいのは、知識というもの、あるいは、文化というものが、資源であり、資本であるという視点です。知識や文化は、それを利用することによって、人間の活動が豊かになるという性質を持っています。私たちは、それを蓄積して、さらに次の活動に生かすということを、特にそれと意識しなくとも日常的に実践しているのです。

さて、文化政策については、残念なことに、ごく狭い範囲の限られた人々の活動だけを対象としているもので自分には直接関係ない、という認識を多くの人たちが持っているようです。2009年の政権交代の後に大きな話題となった行政刷新会議の「事業仕分け」でも、文化事業に税金を投入することの意味と必要性について疑問が投げかけられ、いかにも性急なやり方で廃止や縮減が求められたことをご記憶の方もいらっしゃるかも知れません。

ですが、文化あるいは文化政策は、私たち全員に関わるものです。そこで、アーティストの創作行為が持つ公共性とはどういうものかを以下に考察してみます。

チェルフィッチュというユニット（グループ）名で活動している岡田利規という劇作家、演出家がいる、その代表

作に「三月の5日間」（2005年第49回岸田國士戯曲賞受賞）という作品があります。

2003年3月、イラク戦争がいまにも始まろうとしている時期に、六本木のライブハウスで、カナダから来たPMEというパフォーマンスグループのライブが行われていて、音楽の演奏の合間に、もうすぐ起ころうとしている戦争についてそこにいる人たちが意見を言い合う「政治フォーラムのようなパフォーマンス」が行われていました。「三月の5日間」は、たまたまそこに居合わせた若い男女が、その後、そのまま渋谷のラブホテルに行くことになって、それから4泊5日、そのラブホテルに居続ける、そして、その5日間のあいだに、戦争は始まり、そして終わってしまった、という話です。

この作品では、正面から政治を扱っているわけではありません。社会通念から言えば、およそ立派でもなければ褒められもしない、非社会的な若者の行動を淡々と描いているわけですが、戦争という大事件の一方に、ラブホテルに閉じこもってテレビも新聞も一切みない、携帯も切ったまま、という一種の極限状態にある若者の生態を描いて、とてもリアリティがあり、ある種の衝撃力を持った作品です。岡田氏自身は、新聞の取材に対して、「戦争へのアクセスは、ニュースを見続けることだけではない。見ないと決めている男女が、関心がないわけではない、ということを書いた」と答えています。

チェルフィッチュの舞台には、他では見られないユニークな特徴がたくさんあります。そのひとつは、俳優が演じる役柄と俳優との一対一の対応がないことです。同じ人物の台詞が複数の俳優によって語られ、逆に、ひとりの俳優が語っている台詞がいったい誰の台詞なのかかわからないことが多くあります。「…それで今の話はあとでミノベくんに来てアズマくんが聞いた話だったんですけど、…」というような説明の台詞をはさみつつ、だらだらとした会話が途切れることなく続きます。近代演劇の技法では、舞台

に立っている俳優がある特定の人物になりきることによって、強い怒りや悲しみや喜びなどの感情の高ぶりを表現して観客に伝えることが常識とされてきたのですが、それがここでは完全に拒否されています。

そのかわりに、そのことをしゃべっている人物の、照れやためらいやこだわりといったものが、非常にリアルにストレートに見ている側に伝わります。そして、いつのまにか場面が変わって、その場にいた別の人の視点で同じ話が語り直されます。人が違えば見方が当然違っているので、話される内容自体はほぼ同じ内容なのに、話の中身には微妙なズレが生じます。このように、「反復とずれ」が延々続くので、批評の言語では、これはミニマリズムだ、という言われ方もします。複数の視点が同時に存在しているので、これは演劇のキュービズムだ、という言い方もされます。

チェルフィッチュの舞台は、一度に何万人の観客を集めるようなものではありません。また、取り上げる題材も、取り上げ方も、社会の常識あるいは良識に沿ったものでもありません。ですが、「三月の5日間」に限らず、優れた舞台には、それを見ている人に、この舞台は私にも関わりがある、舞台の上にいるのは私だ、ということを感じさせる力があります。その作品に触れることによって、これまでと違った世界が現れ、これまでと違った感覚や思考を発見する人がいます。この舞台を見たことによって、自分が内に持っていた思いがどういうものだったかを知ることができ、自分の居場所があると感じた、ということがたしかにあったに違いありません。その意味で、チェルフィッチュの作品は、それを見る観客の狭いサークル内でしか通用しないわけではなく、すべての人にとって大きな意味を持っているということができます。

このように、これまで誰も書かなかった舞台作品、誰も取り上げなかった題材による新たな視点を提示することは、作家個人の想像力や世界観（これを私は、新たな「参照系」と呼びます）が公開され共有されることであり、そこには公共性があると私は考えます。ことに、岡田氏が独自の視点で「自分の（内面）世界と自分の外側にある世界を統合する」方法を提示していることの重要性を指摘しておきたいと思います。

さて、ここでようやく、図書館に話を転じます。図書館の特質は、資料を幅広く収集し、それを公開して多くの人たちの利用に供するところにあり、そこに図書館の公共性があります。したがって、図書館の役割とは、多くの人々が求めている読書ニーズに応えることだ、という答えも正解に違いなく、一般にはそのように受け取られていると思います。ですが、そこにとどまらず、アーティストによる新しい

参照系の提示という意味合いでの公共性のアナロジーで図書館の公共性を考えてはどうかと思います。図書の場合、アーティストにあたるのは、もちろん、作家、編集者です。とすれば、「図書館とは、古今東西に及ぶ無数の作家、編集者による、あらゆる知の参照系を提供する機関である」ということになります。参照系とは、さきほどの岡田氏の作品に見られたような、独自の視点を持った世界観と言うべきものを示す語です。図書館にアクセスが可能であることは、自己や世界に関する個人の狭い認識の限界を飛び越えて、多様な参照系からものごとを見ることを可能にします。読書によって新たな発見や知識を共有することの恩恵は、アートにおける新たな表現の発見と同じように、基本的にすべての人に及びます。まさに、図書館は、無数の参照系を提供する「知のインフラ」なのです。実は、図書館も博物館も、その特質は互いによく似ており、最近になってMLA連携（博物館、図書館、アーカイブ間の連携）が目立ってきているのは理由のないことではありません。近年、千代田区立図書館や旭山動物園などの成功事例がよく知られるようになってきたように、図書館や博物館は知的エンタテインメントの宝庫です。読書や研究という行為は、新たな知の獲得による世界の探求であり、それによって「自分の中で世界を統合する」行為であるとも言えます。言葉にすると大げさなようですが、古来、このことが学問というものの持つ意味であったわけです。

ここで、冒頭のテーゼに戻ります。大学図書館は、学生たちの関心を大学に振り向けるための絶好の入り口です。知識を身につけることで、世界がそれまでとは違った姿を見せてくるとともに、それによって自分の存在を意味づけることができるようになる。そのような知的営為のための環境が図書館に整えられていることは、学生が大学から受け取ることができる恩恵のうちの最大のもののひとつであると言ってよいでしょう。

まずは、身近な顧客である学生にそのことに気づいてもらうことが学生の大きな成長につながり、大学の社会的存在価値を高め、それが大学経営上のコアコンピテンス（基幹的競争力）になるのだと言ってよいでしょう。

以上のような理念を具現化するには、たとえばラーニングコモンズのような、学生の好奇心を刺激し積極的学修を促す実践的なしくみづくりが重要です。「言うは易く行うは難し」であろうことを自覚しつつ、知的冒険の世界への導き手としての図書館の大きな可能性に着目して、「図書館は大学の最大の経営資源である」と私は申し上げたいのです。